



Title	『北方言語研究』創刊に寄せて
Author(s)	津曲, 敏郎
Citation	北方言語研究, 1, i-iv
Issue Date	2011-03-25
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/45226">http://hdl.handle.net/2115/45226</a>
Type	bulletin (editorial)
File Information	nls-1-00.pdf



[Instructions for use](#)

## 『北方言語研究』創刊に寄せて

「北方言語」ないし「北方諸言語」という言い方が、日本でいつごろから行われるようになったのか、それを今、詮索するつもりはない。ここでは、いささか個人的な回想を糸口に、「北方言語」研究の歩みについて、その一面を振り返り、本誌創刊に至る経緯の記に代えたい。

私が初めて「北方言語」という言葉と出会ったのは、北海道大学の門をくぐったばかりの1970年、教養課程に籍を置いて、学生便覧をめくりながら文学部の案内を眺めていたときではないかと思う。はじめから言語学に特に関心があったわけではなかったが、池上二良教授というお名前とともに「北方言語」という専門が記されていたのを覚えている。「言語学専攻課程に進むつもりの者は、少なくとも3つの外国語を学んでおくこと」という注意書きに、少なからず気後れを感じた。英語もその1つに数えていいのかわからなかったが、第2外国語として選択したロシア語以外に手を広げることもないままに、教養1年の終わりごろには、言語学を意識するようになっていた。ちょうどそのころ、大野晋著『日本語の起源』（岩波新書、1957年初版）を読み、その学際的なロマン探求の姿勢に心魅かれたことも大きい。その中にも「北方語」なるキーワードとならんで、池上先生のお名前を見つけた。とじ込みの世界言語地図を自分で白地図に写して、未知の世界を眺めたりしていた。2年生後半の学部移行では、迷わず言語学を選択した。移行早々に、授業時間いっぱい口述筆記という「言語学概論」の洗礼を受け、3年生からは満州語だの、ウイльта語だのという「北方言語」のご講義に浴することとなった。いかんせん当時はまだ「猫に小判」で、相変わらず遠い世界の話のように聞いていた。

大学院へ進学してからだろうか、古本屋で『北方諸言語概説』（高橋盛孝著、三省堂、1943年）という古めかしい本を見つけた。これもその「すごさ」が当時わかったわけではないが、終戦前という情報の少ない時代にしてすでに「パレオ・アジア語」や「アメリカ諸語」を祖述しており、まさに北方言語のパイオニアの一人だったのだろう。高橋盛孝氏のお名前は、その後まもなく宮岡伯人先生（当時小樽商大から北大へ非常勤でいらしていた）のご著書『エスキモーの言語と文化』（弘文堂、1978年）の「あとがき」でも見出した。宮岡先生にエスキモー語をお勧めになった先生だったとある。

さて池上先生が「北方言語研究者協議会」を北大で開催されたのは、さかのぼって1965年のことであるが、その研究会の発表者にも宮岡先生とならんで高橋氏のお名前が見える。ことによると「北方言語」を冠した集いは、記録に残る限り、これが最初であろうか。そのプログラムが『北の言語：類型と歴史』（宮岡伯人編、三省堂、1992年）の「あとがき」に掲載されている。この本自体が、第2回北方言語研究者協議会という位置づけで宮岡先生によって催されたシンポジウム（北大、1990年）をもとにしている。この会は、同時に池上先生の古希をお祝いする意味も込められていた。宮岡先生は東京外大を経て、1987年から北大にいらしていたが、この会の翌年にも、知里真志保没後30年記念シンポジウム「アイヌ語の集い」を第3回北方言語研究者協議会として開催された（北大、1991年）。この

記録は『アイヌ語の集い：知里真志保を継ぐ』（北方言語研究者協議会編、北海道出版企画センター、1994 年）という書物にまとめられている。宮岡先生はこの出版と同じ年の 3 月に『環北太平洋の言語』誌（英文篇 *Languages of the North Pacific Rim*、宮岡伯人編、1994 年）を北大から創刊されると、4 月から京都大学へ移られた。

同誌は第 3 号からは和文篇も加えて、編者や発行機関を変えながらも号を重ねた。第 10 号までの目次が、第 11 号（和文篇、津曲敏郎編、北大文学研究科、2004 年）に掲載されている。これを含め 15 号までの目次は津曲の所属研究室ホームページ上でも閲覧できる（<http://www.hucc.hokudai.ac.jp/~r16749/gengo/>）。同誌には、宮岡先生が提唱された、北東アジアから北アメリカ北西海岸に至る「環北太平洋言語圏」の諸言語に関する論考や資料が多数収められており、とりわけ当該地域で実際にフィールド・ワークを行っている若手研究者の発表の場としての役割を担った。これにはもちろん、宮岡先生のご指導のもと、北米諸語の研究者が着実に成果を上げ始めたこと、そしてこれまで閉ざされてきたロシアや中国のフィールドがようやく開放に転じて継続的な調査が行えるようになったことが、その背景にある。さらに 90 年代に入って「危機言語」研究の緊急性が広く認識されるようになり、各種の調査研究プロジェクト、とりわけ科研費特定領域研究「環太平洋の〈消滅に瀕した言語〉にかんする緊急調査研究」（宮岡伯人代表、1999～2002 年度、略称 ELPR）が多くの若手研究者を巻き込んで遂行されたことも、特に北方言語の調査研究にとって大きな推進力となった。『環北太平洋の言語』第 6 号～10 号は、この ELPR 成果刊行物のシリーズとして刊行されている。ELPR 終了後は津曲が和文篇の刊行を継続した。諸般の事情から 14 号で終刊としたいという宮岡先生のご意向に反して、15 号まで同じ誌名で刊行する結果となったのは、ひとえに津曲の責任であり、宮岡先生にはご寛恕を願うばかりである。

『環北太平洋の言語』誌や ELPR に参加した若手研究者のエッセイを集めて、一般への啓蒙も意図して刊行したものに、『北のことばフィールド・ノート：18 の言語と文化』（津曲敏郎編著、北海道大学図書刊行会、2003 年）がある。これには池上先生の序文と宮岡先生の「あとがき」をいただくことができた。どちらからも、北方を志す若手研究者への確固たる指針とあたたかい励ましを読み取ることができる。その後、北大文学研究科では北方研究のあらたな構築と展開を意図して 2007 年に「北方研究教育センター」が設立され、津曲がセンター長を務めることとなった。北方言語関連の活動として、2008 年には池上先生米寿のお祝いの意味を込めて、シンポジウム「サハリンの言語世界」を主催した。海外の研究者を含む 12 件の発表が行われ、のちに 2 件の誌上参加を加えて報告書をまとめた（『サハリンの言語世界：北大文学研究科公開シンポジウム報告書』津曲敏郎編、北大文学研究科北方研究教育センター、2009 年：電子版 <http://eprints.lib.hokudai.ac.jp/bulletin/sakhalin/>）。翌 2009 年には同じく北大を会場に、知里真志保生誕 100 周年記念シンポジウムを、言語学以外の分野も加えて行った。この記録は、いくつかの章を補充して翌年刊行された（『知里真志保：人と学問』北大文学研究科北方研究教育センター編、北海道大学出版会、2010 年）。

一方、北方言語研究者の集いは、上記以外にも各地でさまざまなかたちのもと行われてきた。たとえば早稲田大学語学教育研究所の北方言語・文化研究会は首都圏を中心に活発な活動を展開してきた。同会の設立 10 周年記念シンポジウム（早稲田大学、1987 年）の成

果が『民族接触：北の視点から』（北方言語・文化研究会編、六興出版、1989 年）として刊行されている。また、千葉大学ユーラシア言語文化論講座からは、『ユーラシア言語文化論集』が 1998 年に創刊され、以来、毎年号を重ねている（2010 年 3 月現在 12 号、バックナンバーが電子版で公開されている）。さらに東京外大アジア・アフリカ言語文化研究所では、共同研究プロジェクト「北方諸言語の類型的比較研究」（呉人徳司代表、2010 年度～）が現在進行中である（同プロジェクト関連の刊行物として、T. Kurebito ed. *Linguistic Typology of the North* Vol. 1, ILCAA, 2008, 関連サイトとして <http://www.ling-atlas.jp/>）。その他特筆すべきものとして、北方言語の保持にかかわる国際シンポジウムが 1994 年に国立民族学博物館主催で行われており、その報告書も刊行されている（H. Shoji & J. Janhunen eds. *Northern Minority Languages: Problems of Survival*. Senri Ethnological Studies No.44, National Museum of Ethnology, 1997）。

こうした北方言語研究の歩みを振り返るとき、上記『北のことばフィールド・ノート』の序文で池上先生が書いていらっしゃるように「北方地域の言語についてその話し手を実地に調査して研究する研究者の数が、…数十年前に比べて格段に増加した」が、そのことの意味をあらためて考えてみる必要があるだろう。いずれも程度の差こそあれ消滅の危機に瀕した、これら弱小言語の研究者が増えていることは、もちろん歓迎すべきことには違いない。一方で、こうした調査研究をさまざまなかたちで支援し、連携と向上をはかる努力あるいは体制作りが伴わなければ、せっかくの芽もしぼんでしまうだろう。

その目的に向けて踏み出す一歩とするにはあまりにもささやかな試みで、おこがましきは覆うべくもないが、ここに創刊する『北方言語研究』には、そのような役割を込めたつもりである。具体的には、調査研究の成果発表と相互研鑽の場を提供することで、北方言語研究者のネットワーク作りの一助となることを期待したい。査読制を取り入れることで研究水準の維持・向上をはかるとともに、業績として評価が高まることをめざす。また査読者としてそれぞれの専門家に協力をあおぐことで、多くの人に本誌の刊行にかかわりをもってもらう狙いもある。また ISSN（国際標準逐次刊行物番号）登録や電子版公開をとおして定期刊行物としての認知と閲覧範囲を広め、フィードバック効果を高めたい。「投稿規定」（本誌巻末に掲載）にもあるように、「北方言語」の範囲や投稿資格もゆるやかなものとし、多くの研究者にとって開かれた場でありたい。研究者同士のしなやかな連携の輪が広がることで、本誌そのものが北方言語ネットワークの一つの場となることを願っている。

当面は科研プロジェクト「北東アジア危機言語の記述と類型に関するネットワーク構築」（津曲敏郎代表、2010 年度～[2014 年度予定]、基盤 B）の成果刊行物として年 1 号の定期化をはかるが、「ネットワーク構築」を目的に掲げたこの科研が終了するまでには、「北方言語ネットワーク」が実質を伴うかたちで構築され、本誌の編集刊行も次世代に継続されていくことを願うものである。なお、本科研のホームページも情報交換の場として拡充していくつもりだが、こちらも研究者間のネットワークをリンクするものとして認知され、活用されることを望みたい（<http://www.hucc.hokudai.ac.jp/~r16749/elena/>）。

本誌創刊の呼びかけに応じ、多数の方がその趣旨に賛同して原稿をお寄せくださったことに対し、あらためて感謝申し上げたい。また査読の依頼に対して、快くお引き受けいただき、的確かつ懇切なコメントをくださった査読者の皆様にも心からお礼申し上げたい。今後も、大方のご協力とご叱正によって、本誌が着実に育っていくことを切に願う次第である。

『北方言語研究』第1号 編集代表  
津 曲 敏 郎  
(北海道大学大学院文学研究科)